

世界を舞台に働くという選択

株式会社オリエンタルコンサルタンツグローバル さ さ 佐々 ゆうこ 優子

1. はじめに

建設コンサルタントとして海外の事業に関わるようになってから、早くも30年以上が経過しました。この建設コンサルタントという業種は、まだまだ知らない方も多いかもかもしれませんが、公共インフラや大規模施設の建設・整備事業において、発注者を技術的な側面からサポートする専門家です。これまで、ODA事業を中心に建築を専門として、施設建設や地域的な開発における公共施設の計画・設計で東南アジア、南アジア、南西アジア、中東、アフリカ、南大洋州といったさまざまな国の種々の業務に携わってきました。

今でも、プロジェクトごとに毎回新しい発見があり、周りの先輩方を見ても、まだまだ学ぶことが多いと感じています。同時に、さまざまな国や案件への挑戦に毎回やりがいを感じており、これまでの海外業務の魅力を紹介させていただきたいと思っています。

2. 海外業務に携わることになったきっかけ

私が海外の建設分野の業務に興味を持ったのは、高校生の時、雑誌で見かけた青年海外協力隊

の公募の知らせがきっかけでした。「どこかの国の人のためになる仕事をしたい」という漠然とした思いから、そのための専門として建築・都市計画の分野を学ぶことを選びました。

都市計画の大学院にて、インドネシア人の留学生とともにジャカルタをフィールドとした研究を行ったことから、現地で日本人の専門家の方々と出会い、海外で事業を行うコンサルタントの存在を知りました。

入社後は建築関連と地域開発業務に従事し、開発途上国の開発における公共施設の役割、意義等を実感する経験を経て、5、6年ほど中東の都市開発案件や現地政府の業務に従事した後、改めて建築関係の業務に携わっています。

3. 海外業務の魅力

海外業務といえば、国による生活レベルや安全性の違いを心配する方も多いと思います。特にODA事業を行う国の場合はインフラ整備が追いついていない場所での業務を行うこともあります。しかし、同時に海外だからこそ感じられるやりがいもあると感じています。

(1) 生活を整えるという業務

海外業務の場合、日本での業務とは異なり、海

外のエンジニアと一緒に業務を行うことが多く、チーム内の日本人の数は限られてきます。そのため、専門的なことでも自分の専門分野だけではなく、幅広い事項に対応していく必要があります。一方で、チーム内メンバーに快適に業務を行える状況をつくることも大切なので、車の手配から食事をする場所の確保、安全の確保という具合に、雑用とも思われることも対応が必要になります。その国で暮らし、その国のことを知るのは、プロジェクトの実施上も計画策定やチームの運営にも非常に重要なことでもあります。

(2) 新しい価値観との出会い

国によって価値観が大きく異なることは、新しい国の仕事をするたびに感じることであり、新鮮な驚きを得ることがあります。特に宗教的なこと、人種的なことは、事前に調べて行ったとしても、その国を訪れて実感する違いが多くあります。

例えば、20年くらい前に、アフリカのレソトで大学のプロジェクトに携わった際には、現地の地図では端にある小さな島国である日本のことは、中国のことは知っていても知らない人がほとんどでした。ホテルでは、欧米人とは差別されることも体験しました。

印象に残っていることは、当時その国には運転手が数人しかおらず、レンタカーの運転手の地位がとても高かったことです。運転手に歩かせないように、こちらが駐車場まで歩くという経験はとても新鮮でした。

(3) 距離、時間感覚の違い

ケニアのある地方の業務に関わった時、宿泊していたホテルのスタッフととても仲良くなり、休日に家へ招待してもらったことがあります。「自分の家は、すぐ近くで、毎日歩いて通っている」という説明で、チームのメンバーで訪問することになりました。

念のため車で向かうと、畑を越え、雑木林の中を抜けて、土道を走ること3時間近くかかってようやく到着したのです。ご家族に歓迎され、現地

式の歓待を楽しんだことは言うまでもないのですが、それにしても距離的な感覚に関する違い、地理的空間認識の違いなど、多くの意味で新鮮な驚きの訪問でした。

4. 海外業務の難しさとやりがい

(1) 求められる柔軟性

海外業務を実施していると、設計や入札、施工段階での調整の際に、相手国側の基準や現地に対応可能な工法の違いに遭遇することがよくあります。日本では常識とされている基準や設計思想が当たり前でないことに気付かされ、同時に相手国側との違いを互いに理解し、フレキシブルな対応を取ることが重要になります。その過程では、自分が本質的に理解している必要があります。改めて調べ学びなおすこともよくあります。

インドのヴァラナシの案件では、設計思想と現地で一般的な工法に違いがあり、工事の段階での調整に苦労したこともあります。鉄骨フレームの施工に際して、インドでは一般的でない摩擦接合の適用、さび止めに用いる溶接亜鉛メッキの適用と摩擦係数の確保について、接合面の化学処理などの新たな対応が求められました。さらに、工期の遅れを避けるためにローカル業者が精通している工法を採用するなど、工事業者とコンサルタント側が協力して知恵を絞り、品質を確保しつつ工期の遅れを生じさせずに工事を行うことができました（写真-1）。



写真-1 軒飾りが特徴的な外観

(2) 現地で使い続けられるもの

開発途上国の業務ではよくあることですが、最新の設備を希望されることが多くても、実際には最新設備の導入が必ずしも良いわけではなく、その土地で使い続けられるものを導入することが重要となります。

スリランカの大学では、維持管理費用が高い設備の導入を避けて軟水化装置を設置したのですが、他のドナーが隣の大学に逆浸透膜装置を導入したことから、なぜ導入してくれなかったのかと言われ、隣の大学から接続してもらうことにしました。しかし、その設備も数年で故障し修理費が賄えずに、両大学ともに現地で維持可能な装置を新たに検討することになりました。

現地政府も含めて、どこまで維持管理できるのかを確認しながら模索し、建設後の軌道修正も含めて本当に頭を悩ませました。単純な設備を導入したつもりでも、メンテナンスの人材が変わると使用できなくなる事態を繰り返し、最終的には現地で生産しているもの、壊れてもすぐに修理できるものが最も有効な解決策でした。

(3) 現地の事情、生活を知ることの重要性

今から25年ほど前に、ミャンマーの大学の案件に携わった時のことですが、施設が完成し、現地の先生方や学生たちが本当に喜んでくれたことがあります。しかし、引き渡してすぐ、学生寮のトイレがあちらもこちらも詰まってしまいました。中から出てきたものは、ゴム草履や大量のごみ。地方から出てきて、初めて水洗トイレを使用し、何でも流せると考えた学生がたくさんいたのです。

また、大洋州のトゥヴァルに病院を建設した時も同様です。病院の汚物流しには、想定外のものが流され、張り紙をしたり、使い方を教えたり、さまざまな対応をしても詰まってしまうことが、当面の間続いていました。

今の日本では想定しないようなことが起こること、その土地の自然状況、人々の生活や習慣を理解して、臨機応変に対応することが必要である

と、案件ごとに実感しています。

(4) 海外のコンサルタントとの業務

文化や考え方の違いを実感するのは、相手国に対してだけではありません。一緒に業務を行う他のコンサルタントにも言えることです。

中東のカタールの業務に従事していた際には、16カ国の専門家50名からなるチームでの業務でしたが、この時の経験は、それまで開発途上国での業務を主に行ってきた私にとって、非常に刺激的で勉強になるものでした。専門家の個性や出身国・過去の経験から、計画に関するアプローチ、クライアントマネジメントの方法などの違いが顕著であり、施主が期待するものを提供することの重要性を学びました。同時に、その中で日本的なアプローチの良さも認識することができ、議論して相互に理解していくことの面白さを改めて再確認しました。

(5) 現地のカウンターパートとの絆

ODA事業に戻りますが、何より現地政府のカウンターパートとの付き合いを通じて、プロジェクトの実施のために互いを理解しようと頭を悩ませることで、現地の方々との強い絆ができるのが、海外事業の魅力の一つだと思います。

中には家族や知り合いを含め、仕事だけの関係を越えた付き合いをさせていただける人も多く、いろいろな考え方の人々と関わることもできることが、海外業務の楽しさを倍増させてくれていると言えます。

インドのヴァラナシの案件では、その特殊性から、インド側も日本側も大きなプレッシャーの中で準備を行っていたこともあり、計画、入札、工事の各段階でお互いに議論をくり返しました。特に、大事な会合に向けたプレゼンビデオを作成したり、資料をまとめたり、現地スタンダードとは異なる入札図書承認取り付け等で、夜遅くまでともに準備して案件を形にした経験を通じてできた絆は、何にも代え難いものになりました。

(6) 地元の人々の笑顔に会えるやりがい

そしてやはり一緒に計画を立てる時、プロジェクトが進行中の時、そして完成した時に地元の人たちの喜ぶ顔を見ることができると、それが一番やりがいを感じられる瞬間だと思います。

インドの案件では、完成後の舞台設備・装置の試運転を行った際に、現地の大学でパフォーマンスを教える先生方に協力してもらい、音響や照明の実習を兼ねたパフォーマンスを行っていただきました。その際にスタッフの家族が見せた笑顔や、舞踊を披露した現地のダンサーたちの目の輝きも忘れられません（写真-2）。



写真-2 現地大学の舞踊の先生方の協力で実現した舞台演出の実演実習

5. 今後に向けて： 次の世代の方々に

先に述べたとおり、海外だと柔軟に考えられる

フレキシブルな発想が求められることが多くあります。そんな時に必要になるのは、現地側のカウンターパートと議論するための本質的な部分の理解であり、議論を通じて最適解を探していくことです。グローバル化が進む中、日本の企業の海外進出のみならず、海外企業の日本進出、そして海外企業との協業体制などが多く見られるようになりました。おそらく今後も増えていくものと思われます。

ODA 事業といっても、日本式のみならず、よりグローバルスタンダードな、あるいは現地の事情やルールに即した提案を求められることが多くなってきていると思います。しかし、その中で改めて日本の技術の優位性を見いだしていけるものとも考えています。

これまで数多くの案件に関わってきましたが、特に ODA の業務を行う時には、今でも「この国の人たちのために自分に何ができるのか」、「本当は何が必要とされているのか」と考えることがあり、この問いはずっと続くのだと思います。

でも同時に、案件ごとに新しい驚きと発見が多く、やりがいを感じられる仕事だとも思います。若手のエンジニアの方にも、ぜひ海外の業務に興味を持っていただけるとよいと願っております。



写真-3 コンベンションセンター全景と開館式にてモディ首相によるルドラクシャ（菩提樹）の記念植樹の様子